

新約聖書注解シリーズ

# コリント人への手紙 第一 J.B.カー

PAUL'S FIRST EPISTLE TO  
THE CORINTHIANS

An Exposition

by

James B. Currie

新約聖書注解シリーズ

# コリント人への手紙

## 第一

J.B.カー

一節一節の詳細な解説

伝道出版社

# PAUL'S FIRST EPISTLE TO THE CORINTHIANS

An Exposition

by

James B. Currie

Lovingly dedicated to my mother Emily  
and to my wife Edythe, 'fellowhelpers  
to the truth'

EVANGELICAL PUBLISHING DEPOT

5-17 Higashi 2 Chome  
Kunitachi Shi, Tokyo 186  
Tel. (0425) 72-2070

# 目次

はじめのことば	五
一章〜四章	争い
一章一〜九節	読者へのあいさつ
一章一〇〜三一節	問題の要点
二章一〜一六節	パウロの訴え
三章一〜二三節	争いの原因
四章一〜二二節	結論
五章	不品行
六章一〜一〇章	問題
六章一〜二〇節	無知の結果
七章一〜四〇節	結婚について
八章一〜一三節	肉を食べることについて
	九〇
	一〇八
	一二三
	一五四

九章一〜二七節	自由について……………	一六八
一〇章一〜一章一節	偶像との関係……………	一八七
一二章〜一五章	混乱	
一一章二〜一六節	男と女の関係……………	二一五
一一章二七〜三四節	パン裂き……………	二二八
一二章一〜三一節	霊の賜物の本質……………	二四四
一三章一〜一四章一節	霊の賜物の原動力……………	二六七
一四章一〜四〇節	有益な霊の賜物……………	二七八
一五章一〜五八節	よみがえりの教え……………	三〇八
一六章	献金と終わりのことば……………	三五〇

お断り 本書での引用聖句は、一部が著者の私訳になっています。

## はじめのことば

### コリント

第一世紀の中東の国々の状態は、いろいろな意味において福音の働きを助けるものとなっていました。紀元前のアレキサンダー大王の征服によって、ギリシャの言語と文明が、すべてのところに広まっていました。また、アレキサンダーの支配した帝国の後に起こったローマ帝国によって、世界中にりっぱな道路が建設され、遠国までの旅行が比較的容易なものとなりました。そのうえ、数百年前に異邦の国々に散らされたイスラエル民族によつて、「唯一の真なる神」を知る知識——これはユダヤ人社会の影響によるものですが——も言い広められていたのです。このように、当時の世界全体で用いられた言語、国から国へ旅行できる道、創造者なる神を知る知識の浸透などが、クリスチャンたちによつて初めてキリストの福音が宣べ伝えられたころの社会の状態でした。ですから、現在に至るまで継続している「恵みの日」の当初の状態が、神の働きによつて備えられたということ

疑う余地はありません。

しかしながら、初代の弟子たちの働きを妨げる事情があったということもまた事実です。その著しいもののひとつは、ローマ帝国全体に、ごく一般的なこととして行きわたっていた、すべての宗教に対する無関心な態度です。特に使徒の働きのうちには、ローマ帝国の役人たちの、宗教の議論にまったく手を出そうとしない態度が明らかにされています。一八章に出てくるガリオという地方総督が、この態度を示しました。一七節によると、ガリオは「そのようなことは少しも気にしなかった」のです。それに反して、新約聖書に出てくるローマの七人の百人隊長はみな、福音を宣べ伝えた神のしもべたちに対して好意的でした。

また、経済的な問題がからむと、異邦人たちは激しく反対しました。使徒の働き一九章によると、エペソの銀細工人デメテリオとその職人たちがパウロの福音に反対しましたが、その理由が二四節に記されています。彼は「銀でアルテミス神殿の模型を作り、職人たちにかなりの収入を得させていた」。パウロの生涯の終わりがらまで起こった反対は、そのほとんどが、信じていないユダヤ人からのものでした。中東の国々の宗教に対する無関心な態度の結果、彼らの道徳的標準は驚くほど低くなりました。それゆえに、パウ

口の福音によって宣べ伝えられた聖さの標準は、一般の人々にとって歓迎できないものでした。今日と同様に、昔の人々も、宗教的な心を満足させる宗教、すなわち道徳的な面での束縛もしない宗教を望んでいたのです。しかし、パウロとその同労者たちによって宣べ伝えられたキリストの福音は、はなはだしい悪の社会の中で、最高の神の聖さを要求するものでした。

第一世紀の異邦の国々の典型的な状態を示していたのがコリントです。この市は、ローマ帝国全体の思想と慣習とを反映していたので「小帝国」とも呼ばれていました。そして、ローマのアカヤ州の州都であり、その地方総督の駐屯地でもありました。またその場所は、北のマケドニヤと南のアカヤとの間の地峡に位置し、産業界の中心地として重要な拠点となっていたので、ローマ帝国の中でも繁栄した町のひとつでした。すぐ近くにあるケンクレヤ港に入港する船の船員たちによって、コリントの人口は増大し、国際的になりました。また、アルテミスという女神崇拜の中心地でもありました。旧約聖書のアシユタロテと同じ、愛を売り物にするこのアルテミスを祭った神社は、どこも不道德と不品行の場であって、コリントにあるアルテミス神殿もまさにそのとおりでした。

紀元前一四六年に、コリントはローマ帝国に反抗したため破壊されましたが、前四五年



ごろ、ユリアス・カイザルによって再建されました。ですから、パウロが紀元五一年に初めてコリントを訪れたとき、その町はまだ百年の歴史もなかったのです。住民はおもにギリシャ人、ローマ人、ユダヤ人でしたが、その人口はケンクレヤ港に入ってくる船員たちによってたえず増大しました。それゆえに、町の中には邪悪と放蕩がはびこり、コリントの市民たちが喜んでこれらの肉の快楽に酔っていたことは容易に想像できます。コリントの市民たちの評判はきわめて悪いものでした。演劇などで「酔っぱらい」を表現するとき「コリント」ということばが使われましたし、今日でも、英語の「コリント」ということばは「道楽者」を意味します。

新約聖書の記録の中に、不思議なことがひとつあります。それは、神はコリントに対して特別な目的を持っておられたらしいということです。紀元五〇年ごろに始まった伝道旅行のときに、パウロはピリピ、テサロニケ、ベレヤ、アテネを訪問しました。初めの三つの町では激しい迫害が起き、最後のアテネの人々はまったく無頓着な態度を示しました。それゆえパウロはアテネを去ってコリントへ行きましたが、そこに着くとすぐ、この汚れた町に神の目的を成就するいろいろな出来事に出合ったのです。まず、他のユダヤ人たちとともにローマから亡命してきたアクラとプリスキラがすでにコリントに住んでいました

し、間もなくシラスとテモテもパウロのもとに來ました（使徒一八章）。それだけでなく、テサロニケの若い信者たちがアカヤ全土に福音を宣べ伝えました。パウロはコリントに着くとすぐ、神から強い確信を与えられました。神がこう言われたのです。「わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」（使徒一八・10）。

これらのことによつて、コリントが、第一世紀の中東の国々の伝道の働きにとつて、神のご計画のうちでどれほどたいせつであつたかがわかります。コリントは福音の宣教者たちにとつて見込みのないような町でしたが、神がその町でどのように働いてくださったかということを知ることこそ、現在の困難な二十世紀後半に生きている私たちにとつて大きな励ましとなることでしょう。神のしもべたちがみこころのとおりには働くならば、神はいつも彼らの道を備えてくださるのです。そして、伝道の妨げのように見えるものは、神の御手のうちにあつて、その福音の働きを前進させることとなります（ピリピ一・12）。コリントを初めて訪れたときのパウロのばあいがまさしくそうでした。

## 神の集會